

Press Release



アメリカンフットボール日本選手権
プルデンシャル生命杯 第75回ライスボウル

富士通フロンティアーズが2年ぶり6度目の日本一

新形式のライスボウルでパナソニック インパルスを超える

パナソニック インパルスと富士通フロンティアーズによるアメリカンフットボール日本選手権プルデンシャル生命杯第75回ライスボウルが1月3日、東京ドームで開催された。社会人王者をかけた一戦は、富士通が24対18で勝利して2年ぶり6度目のXリーグ王座に就いた。

これまで「学生王者対社会人王者」という対戦形式だったが、今年度から社会人リーグ「Xリーグ」が王座をかけて戦う形式に変更されたライスボウル。序盤はお互いの守備陣が踏ん張り、両軍無得点の静かな展開。均衡が破れたのは第2クォーター。6年ぶり5度目の王者を目指すパナソニックは、オープニングドライブで32ヤードフィールドゴールを外していた佐伯真太郎が、34ヤードのフィールドゴールを今度はきっちり沈め先制した。



3点ビハインドの富士通は、直後のシリーズでクォーターバック（QB）高木翼が強肩を披露して、左サイドを縦に駆け上がったワイドレシーバー（WR）松井理己へ56ヤードのロングボムをヒット。一気に敵陣19ヤードまで前進すると、最後はゴール前2ヤードからのフォースダウングャンブルで右にロールアウトした高木が自らエンドゾーン内にボールを運び、富士通は逆転に成功した。



アグレッシブな守備でパナソニックの攻撃をパントに封じた富士通は、高木と松井のホットラインが再び開通。自陣 34 ヤードから 37 ヤードのロングパスが通ってパナソニック陣 29 ヤードまで侵攻。ランニングバック (RB) トラッシューン・ニクソンのランなどでゴール前 11 ヤードまで進み、ラストは QB 高木が中央に切れ込んできた WR 松井へドンピシャのタイミングでタッチダウンパスを成功させて、富士通がリードを 11 点に広げた。



前半のうちにこれ以上離されたくないパナソニックは、QB アンソニー・ロウレンスが WR レオンシャ・フィールズへ 46 ヤードのロングパスで一気に富士通陣内に侵入。RB ミッチェルビクタージャモへのパスでゴール前 7 ヤードまで攻め込むと、ラストもロウレンスがプレーアクションから左サイドで待ち構えていたノーマークのフィールズへのパスが決まりタッチダウン。さらに 2 点コンバージョンも成功させてフィールドゴール 1 本差に詰め寄り、前半を折り返した。

後半もお互いの意地がぶつかり合う締まったゲーム展開だった。パナソニックは、フリーリッカーなど多彩な攻撃を展開して、着実にボールを前進。すると、ゴール前 6 ヤードで QB ロウレンスがパンプフェイクを入れてからエンドゾーン内中央でフリーになっていた WR 木戸崇斗へ逆転のタッチダウンパスを決めた。



追う立場になった富士通は、エンドが変わった最終クォーターに再び試合をひっくり返した。第3クォーターから続くドライブで、2度のフォースダウンギャブルを成功させる執念を見せレッドゾーン内へ進入。さらにQB高木がWR小椋恭平へのパスでゴール前3ヤードへ歩を進めると、QB高木が自らエンドゾーンへ突っ込むこの日2つ目のタッチダウンランでフィニッシュした。

負けられないパナソニックもすかさず反撃。QBロウレンスが木戸、ブレナン翼へ好パスを連発してゴール前まで前進する。しかし、RBミッチェルがエンドゾーン手前で痛恨のファンブル。これを富士通のディフェンスバック（DB）藤田篤がエンドゾーン内でリカバーしてターンオーバーとなった。

勢いに乗る富士通は、自陣24ヤードからの攻撃シリーズでRBニクソンがディフェンスをすり抜ける素晴らしい走りを見せ50ヤード獲得。この得点機を29ヤードのフィールドゴールにつなげてリードを広げた。

逆転のラストチャンスにかかるパナソニックは、富士通のフォースダウン1ヤードを止めて攻撃権を奪取。QBロウレンスがパスをつないで敵陣まで侵攻するも、第4ダウン1ヤードの場面で、QBロウレンスがファーストダウン更新を狙ったブレナンへのパスは無情にも失敗。この瞬間に富士通は2020年以来のライスボウル制覇を手中に収めた。

試合のMVPには5回のパスキャッチで124ヤード、1タッチダウンを記録した富士通の

WR 松井が選ばれた。